

学校現場を支援する学生ボランティアの実践力を伸ばすアクション・リサーチ

Action Research for Improving School Volunteering by Student

今村 こころ (Kokoro Imamura) 指導：浅田 匡

【問題と目的】

近年、学校において教師の仕事は多岐に渡り、教師は多忙になるばかりである。従って、教師が自らの力量を向上させるために、社会全体、特に大学との連携が必要となってきた。本研究では、2010年度より、教師の力量向上を目的とする立場から、大学生ボランティアという形で小学校への支援（①各学級・学校全体の教育活動の補助②ゼミや授業分析等、教師に学びの場の提供）を継続的にこなっている。しかし、2010年度は、活動が初年度だったこともあり、様々な課題が明らかになった。2011年度は、これらの課題の中でも、学生ボランティアの実践力を向上させることに注目し、活動を振り返る機会（日誌・全体反省会（ゼミ全員＋学校関係者））を仕掛けとして導入した。

本研究では、アクション・リサーチ（以下AR）の枠組みに基づき、前年度の実践上の課題解決のためのボランティア活動モデルを作成・実施する。そして、学生自身の変化・成長の様相を明らかにすることを本研究の主たる目的とする。

【方法】

＜対象＞埼玉県所沢市内の小学校（2校）及び、本研究室（学部3年7名、学部4年3名、院生1名の計11名）

＜内容＞ARに基づいた大学生ボランティア活動（毎週1回終日参加、隔週で2校の小学校に入る）を実施し、①学生の活動日誌（毎回）②全体反省会（月1回程度）の発話記録③反省会前・後の振り返り課題を収集した。本研究では、学生の実践力の成長を、「いつ【時間】×何を【活動内容】×どのように振り返ったのか【リフレクション】」と捉える。分析は、記述からカテゴリを帰納的に作成し、分類を行った上で、その出現頻度の変化を捉え、記述の内容分析を行う。

＜調査期間＞2011年4月～2012年3月*

【結果と考察】

1. 学生の成長の様相

リフレクションは、時間の経過に伴って【想起】から、

【説明】が増加した。ただし、【反省】するものに関しては、【関心】・【疑問】より深い【意欲】・【自戒】・【提案】にまで至る記述量はほとんど見られなかった。【関心】・【疑問】はARサイクルの（1）問題同定に該当する。従って、学生にとって、事実を説明し、それらの中から関心や疑問を抱き、問題として認識する段階がARの1つの関門であることが明らかになった。また、内容分析の結果、全体的・印象的な事実から、より個別的・具体的な事実へと記述内容が変化した。

2. ARに基づくボランティアモデル（仕掛け）の効果

「書く」仕組みである、活動日誌と反省会前後の課題は、自分自身をリフレクションする場であるとともに、紙面上で他の人と意見を交換するコミュニケーションの場としても機能した。一方、「対話する」仕組みである、反省会は、個々の学生のみでは知りえない情報を収集し、共有する場であるとともに、自分の主張を相手に的確に伝え、問題解決を志向した対話を体験することによって、コミュニケーション能力を向上させる場としても機能した。以上より、現時点では少なくとも2011年度のボランティア活動への課題解決の方策は本活動の改善に有効に機能していると捉えられる。

【今後の課題】

本研究では学生の上に焦点を当てたが、今後は学校現場と大学（地域社会）の連携という観点を踏まえ、①現在の日本の教育現場において実行されているボランティア活動の様相を明らかにし、本活動の位置づけを行い、②本研究で実施するARに基づくボランティア活動の軌跡をさらに詳細に分析し、参加者自身・参加者を取り巻く環境の変化・成長や、相互作用の様相を明らかにする必要がある。そして、以上の結果を踏まえ、継続的に実施可能な学生ボランティア活動モデルを検討することが課題である。

* 本研究は12月途中段階までのデータに基づく